如是我觀

田村寛呂

▲俗人は自ら知れることを知らず、却て知らざることをも知れりといふ學者の前に拜伏す。

▲俗社會が學術を侮蔑するは恕すべし、學者が人生を翻弄するに至りては許すべからず。

▲戀愛を罵る者その實は多く肉慾に走る、戀愛をかつぐ者も亦實は肉慾を遂げたさの事なり、共に與らずと雖も亦そこに妙味あるが如し。

▲爲めにする處ありて恩を施すものはヤマ師なり

▲恩を施して報恩を責むものは最も慘酷なる高利貸なり。

▲人の恩を以て私慾を濟す者は盜賊なり

▲恩をうけて報効を成さゞるものは詐僞師なり。

▲露西亞、日耳義、西班牙あたりの今日此頃は、少しく興味あらずや。

去れど尋常普通の事なり。

▲國家の爲めなど呼號する者の實際爲すことに、國家の爲めなるは少く、國家を解する者は勿論無し。孜々營々として利己一邊の樣に見ゆる者には却て悟道者多し。

▲知ッて興ありげなるは日本の戊辰革命の裏面なり。

▲人の無意識的普通的趣味嗜好品性は秋毫も癈るゝ處なし。之を以て飾て人を欺くは唯自己を愚にするに過ぎず。

▲內容と實効とよりいへば英雄も凡人にして、凡人も亦英雄なり、兩者の眞價に至りては未だ俄に軒輕し易すからす。

▲然れども英雄は矢張英雄にして、凡人はどこまでも凡人なることは疑ひなし、現在この區別が存すればなり。

▲猥に英雄を崇拜するものは多く英雄を知らざる者なり。猥に凡俗を

侮る者は元來人間なるものを知らざるに座す。

▲大抵は天に向ッて唾するなり。少くとも物識り顔するものは皆然り。

▲船はちやんころでも炭薪やつまぬ、つんだ荷物は米と酒、この歌よく日本人の氣前を言ひ表はしたらずや。

▲一人の眞友あるものは天下の勝利者なり。

▲天才は山頂より轉び落る石の如し、善惡とか何とかに拘はらぬ大事業をなせど、自ら傷病を被りて破滅せざるもの少し、勿論自分も他人も之を止めようが無きなり。

▲君子リンコルンがその競爭者を押しのけて自ら大統領となりし襟懷こそ羨ましけれ。「少しばかり味をやり居るわい」といふを禁ぜざる也。

▲先帝臣が謹愼を知る云々、孔明がこの語亦大なり、通常所謂英雄豪傑輩の到底吐き能はざる處のもの。

▲燈臺の下の暗きを曉るは容易の事に非らず、恰がも世界をめぐッて來ねば日本の分らざるが如し。

▲眞理はど卑近の處にありといふ事を解するまでにはこれ又容易の事に非らず。況や眞理その者をや。

▲眞理は到底眞理なり、何物にもあらず、故に知るべくして、而も知るべからず。

▲神があるとか無いとか、その性格はどうとか、クリストは何だとか、宗教の要不要とか、そんな議論は唯學者達の論理の練習問題たるにすぎず、余輩俗人は不關焉。

▲人々の絶叫道唱多くは囈語のみ、耳を貸すまでもなし。然れども囈言と雖も其の價値は絶對なり、夢幻とて悉く之れ實有ならざるはなきなり。

▲宇寅の廣さ、世代の遠さ、そこに唯一我の開展を看る、無我亦主我の認識形式の一「我」は大なり。

▲唯に洋々として茫々たる大能の美妙に住するのみ、焉ぞ名目を知らむ。

（五月廿日稿）

寵辱不レ驚閒看二庭前花開花落一去留無レ意漫隨二
天外雲卷雲舒一晴空朗月何天不レ可二翺翔一而飛
蛾獨投二夜燭一清泉綠卉何物不レ可二飲啄一而鴟鴞
偏嗜二腐鼠一噫世之不レ爲二飛蛾鴟鴞一者幾何人哉。

第五　閑文字

日本道歌短集

白水

檀林皇后　聖后御諱は嘉智子人王五十二代嵯峨帝の后なり、禪法を信じ唐國の義空禪師を檀林寺に迎へて法要を尋ね遂に所悟ありて此歌を咏じ玉ふ、唐土の齊安國師遙かに此歌を聞きて深く法乘を得たる人なりと感せしとぞ、嘉祥二年壽六十五にして崩じ玉ふ御遺言ありて尊骸を嵯峨野に捨てしめ容色變じて乱穢の婆を示し人をして愛看の念を斷たしめ玉へり。

われ死なば燒な埋むな野に捨てゝ、
　やせたる犬の腹を肥やせよ。
もろこしの山のあなたにたつ雲は、

こゝにたく火のけむりなりけり。

榮西禪師　師名は榮西號は明庵初め台密の蘊奥を究め後宋國に入る兩國疫病を除きて其德を顯はす宋帝感し三千光の號を賜ふ、虛菴敞禪師に法を嗣ぎ歸朝して壽福聖福建仁の三寺を開く、是れ日本禪宗弘通の始なり、茶の實を採り來り筑前脊振山に植ゑ、且喫茶養生記を著はして茶の功を賞す、本朝茶を用ふる事も亦師を初めとす。

奥山の杉のむらだちともすれば、
おのが身よりぞ火を出しける。

明慧上人　名は高辨號は明惠幼にして父母を失ひ高尾に登りて薙髮す、深山の岩上に靜坐しまた榮西に見て禪要を究め、達摩大師の講式を述作し、また春日神君常に師が室に來適し玉へり、建永元年拇尾を開き三賢道宗を中興し、同四年正月十九日慈氏の寶號を唱へ右脇にして化す、春秋六十才なり

いつまでも明ぬくれぬといとなまん、
身はかぎりあり事は盡きせず。

道元和尚　通忠卿の子なり十三にして叡山に登りて出家し、后宋國に渡て汎く諸州に參し、遂に天童如淨禪師に法を受け歸朝して奥聖永平二寺を開創す、建長五年八月廿八日壽五十四にて化す、勅して佛法禪師と謚す、宋にありし時一夜荒村に宿せしに一の虎來て害を加へんとす、時に其柱狀忽ち龍と化して虎を逐ひ退けしとなん、今も虎は手の柱杖と號し本山の什寶たり。

水鳥のゆくもかへるも跡きえて
されども道は忘れざりけり。

法燈國師　名は覺心號は心地初め東大寺の壇に登り又高野に密法を學

ぶ、后宋國に入て無門開に印紀を受け歸朝して紀州鷲峰西芳寺を開く、其地元より妖怪有て人を惱ますあり、即ち之を消伏す、又宋國にありし時五臺に上りしに、文殊出現して繡絲の袈裟を授く、歸朝の後伊勢の神祠を訪ふ太神宮來現して其けさを求め玉ふ、即ち之を献ず永仁六年十月三日九十三にして死す。

何事も夢まぼろしとさとりては、
現なむ世の住居なりけり。

大覺禪師　名は道隆號は蘭溪宋國西蜀の人にて無明性公の法嗣なり、後嵯峨天皇の寛元四年海を越て本朝に來る、北條時頼建長寺を營み師を請して開山とす、弘安元年七月廿四日寂す勅して大覺禪師と謚す、これ本朝禪師號を賜ふの始なり。

年毎にさくやよし野の山ざくら、
樹を割りて見よ花のあるかは。

法心上人

あしなくて雲のはしるもあやしきに、
何をふまへて霞たつらん。

無住長老

世の中はあるにまかせてあられけり、
有らんとすれすればあられざりけり。

北條時頼

心こそこゝろまよはす心なれかし
こゝろにこゝろこゝろゆゑすな。

佛國國師

たてぬ的ひかぬ弓にて放つ箭は、

おたらざれどもはづれざりけり。

如大禪尼（加賀の千代）

とやかくと工（たく）みし桶の底ぬけて、
水たまらねば月もやどらず。

大燈國師

三十余りわれも狐のあなにすむ、
今化さるゝ人もことはり。

夢窓國師

きくは耳見るは眼のものならば、
こゝ路は何のぬしとなるらん。

萬里小路藤房

吹く時は音さはがしき山かせも、
ふかざるうちは何となるらん。

楠正成

仁と義と勇にやさしきものゝふは、
火にさへやけず水に溺れず。

佛德禪師

ふればまづつもらぬうちは、
吹捨てゝ風ある松は雪をれもせず。

月庵禪師

枯果てゝしかも花さく梅が枝に、
聲をもたてず鶯の啼く。

楠正勝

笛竹の聲のあるじを尋ぬれば、

地水火風の四大なりけり、

徹書記

出るとも入るとも月を思はねば、
こゝろにかゝる山の端もなし。

一休和尚

本來の面目坊が立姿、
ひとめみしより戀とこそなれ。

蜷川新右衛門親當

生れゐるこの曉に死ぬれば、
きふの夕は秋風ぞふく。

一路居士

月やみむ鄕にはみへずながらへて、
うき世をめぐる影もはづかし。

玄虎藏主

はれもなく人も渚のうつぼふね、
月ばかりより乘りてみへける。

蜷川親當妻

あさ糸の長くみぢかしむつかしや、
有無のふたつに何か放れん。

内大臣實隆公

おしへぬにわれから我とこゝろへて、
戀をば人のならふものかは。

千利休居士

古路だに岩木と那らば其儘に、

都の中を住みよかるべし。

澤庵和尚

佛法と世法は人の身とこゝろ、
ひとつかけても立てぬものなり。

雲居和尚

物毎に執着せざるこゝろこそ、
無念無想の無住なりけり。

愚堂和尚

わし原や絶てひさしきのりの道を、
蹈わけくるは此翁かな。

一絲和尚

梅が香をさくらの花に匂はせて、
柳の枝にさかせてしがな。

大愚和尚

しればまよひ知らねば迷ふのりの道、
何かほとけのまことなるらん。

大納言光廣卿

花ざかりみし人いつら塵ひとつ、
積らぬさきのみよしの丶山。

桃水和尚

念佛もしねて申すはいらぬ事、
もし極樂を通り過ぎては。

盤珪禪師

さしむかふ心ぞきよき水かゞみ

色津かざれば垢つきもせず

鈴木正三

さし出づる鋒先おれよ物毎に
をのが心をかなぢにして

無難禪師

わが法と柳の絲のもつれ髪
ゆふはいはれずとくにとかれず。

梅天禪師

しらざるは佛も人も同じこと、
さてこそ人の迷ひこそすれ。

鐵眼和尚

釋迦阿彌陀地藏藥師と名はあれど、
同じこゝろの佛なりけり。

澤水禪師

何年もいふべきことはなかりけり、
問はで答ふる松風の音。

慧極禪師

それもみれそれにあらねば龍田山、
紅葉の錦たれか織りけむ。

月坡禪師

染めねどもおのが色〳〵おのづから、
松は綠に雪は白妙。

芭蕉翁桃青

佛法は障子の引手峯のまつ、

燧袋にうぐひすの聲。

拙堂和尚

八百のうそを上手にならべても、
誠ひとつにかなはざりけり。

賣茶翁

笛ふかず太鼓たゝかず獅子舞の、
あとなしになる胸のやすさよ。

覺芝禪師

生死したいのがれはなゐぞもろ人よ、
きのふの夢がけふもさめねば。

天柱和尚

まゝよやれ住めばこそあれ難波江に、
よしといふともあしといふとも。

面山和尚

ひと口に呑みたる水の冷たさを、
人の問ふともいがゞ答へん。

白隱和尚

山居せばよし野の奥よそれよりは、
隻手の聲やふかきかくれ家。

遂翁和尚

うか〳〵と月日を過ごす修行者を、
井づゝの上の茶椀とやみん。

東嶺和尚

あらはれて鏡にものは移れども、

なか〳〵色は分らざりけり。

酒の内直寐（無名の雅才）

山方生

黄表紙作者としての喜三二、狂歌師としての手柄岡持の名は、馬童走卒だも知らぬものなきまで鳴り響きたれども、その名なくして其才をさ〳〵岡特にも比すべきものを酒の内直寐本名飯塚三平となす。前人が一枝の骨、一塊の肉を收むるは限りなき功德とぞきく、吾はその殘せる心血を收めて今彼の爲めに供養を修せん。

三平（三兵衛とかけり）秋田藩の重役にして政治にも立さはりたる故に岡持の如く戯作者、狂歌師の夥伴には立入らざりければ、「狀歌百人一道の撰にも入らず、又其集とて刊行せるものもなけれども、彼我贈答の吟を併せ錄せる「大福帳」（一名金吟出入帳）一冊ありて、彼の作は過半この裡に收められぬ。然して其の狂歌の優劣はともあれ、人口に傳はりしものは、

小姓役の時なりしと覺ゆ或日のこと腹心地例ならず城内の便所にいりて用便を足せし後厠をいでしに脱き捨ておきし袴のあらぬに驚きいろ〳〵探がしたれど遂に見出しかねぬ、去る所殿より急のお召なり無腰苦しからずとのこと恐る〳〵御前に出れば袴は確とたゝみて殿の側方にあり、ハッとおもふ所をたゝみかけて三兵衛一首よめとの上意にとりあへず

袴のはら上にとゞまり在し〳〵て、
　罰があたかと畏み〳〵。

時に三兵衛名は恰とよびぬ舊稱な左門なり。

去年までは寒さ〳〵といへりけるが、

春が來たとてわッたかになる。

「雜巾」といふ題にて

雜巾を當字にかけは倉に金、

矢ッ張りこれもふく者である。

この他數あるべげれど今は坐右に其書なければ、一々あげ難し、彼の多才なりしとは和歌に「紀勝也」漢詩に「近方亭橘子淑」、戲歌に「酒の内直寐」、狂詩に「酒袋の粕」、「俳諧に「燕雀坊文鶴」、の稱ありしにても知るべく、就中狂歌と俳諧はその長所なりしならんか。三兵衛幼名は福松、後半助、左門、恰と改め、隱居の後は字を改めて盛瓶と名けり、これによれば酒を好みしと知られぬ。其俳諧中檀林風の數首を左に載す。

（以上は吾友松隱子の「文鶴の俳句」と題せる中より抄錄しかれて吾が心覺の節々を加へたるなり）

交鶴

玄關の物申は誰ぞけさの春。

〃

物いはぬ給仕や宿の閑子鳥。

〃

星に借す褌さらせゆふ涼み。

〃

名月や此夜を何んと酒の錢。

〃

初雛や淺黃縮めんもみの裏。

〃

七兵衛は腕の强さは大根引。

〃

歸去來はなさなさまへ横しぐれ。

骨豚

非歌

夕の空

あな、うるはしの空や、何處と無う青みおべる銀鼠色の高き空夢のや

うにぼかしたる薄菫色の低き空、それに、一部褐色をまじへて濃く淡くうかべる斷雲、片雲、輝くさまにはあらずたゞよへる皓き淡き月。あゝ、これ何たるうるはしさぞや、夕暮の秋の空のうるはしきかな。

秋の野

秋の野、何ぞ可憐なるや、その草花の何ぞ美しきや。可憐なるよ、秋の野は。春のそれに勝りて美しさは秋の野ぞ。

秋の花

秋の野の花は、肅殺たる大氣の冷かに動かむとするの前に咲きいでゝ、萬木の將に葉を落さむとするに照應す。彼れ唯神の恩寵を感謝して、その榮えを夕の星の前に捧ぐるのみ、彼れに實らむ望みありとは人の想ひをして感せしめがたきなり。この故に可憐なり、この故に清冷なり。春を誇る多くの花の、中に何等か勢ひのみちあふるゝものありて、

艶冶妖蕩の媚態を現ずるが如きを見ず、秋の花は清くして人をして憐れましむ。

大谷川

清きかな、烈しきかな、清さはげしさの權化なるかな、この大谷の溪の水や。明瓏透徹、躍りては素練をみだし、碎けては白雪を散らす、白箭を束ぬ射る流れの走り、しかく疾きを見ずや。はた涯の凹にあひては、つと傍よりて青き白き泡を底の底より湧きかへしつゝ、輪の如くに旋る小さき淵に、藍色なせるうづまきのすさまじきを見ずや。さてもこの畏ろしきばかりのすさまじさよ、さてもこの魅せらるゝばかりの清さよ。

あゝ君よ、崖頭に立ちて神往せるがごとく、夢見るさまにながめ入りたる君よ。君は無盡の力、不當の勢、箭の如くに飛びて巖をも碎かむず

る働き手の、さても觸るれは斫れむその清さに、何をか見得て、今俄にうちはゝゑめるぞ。

神の庭

空色の、山色の、林色の、野色の、水色の麗はしく、艶々しさに於て、人の情の濃かに温かきに於て、人の想の清く氣高き一點に相貫通して疑はず、滯ふらざるに於て、身を以てその中に横へつゝ眠るとも醒むとも自ら念ひ起さゝる我は、唯いひしらぬ樂みの心の奥底より涌き流るゝを感ずなる。さてはこゝにも亦妙なる能きの、彼のおもてに、我の後ろにひそみつゝ、我を撫で彼を育むを認め、此の形、彼の容、空水相共に一體の中に融け滿ちて、一つの緒琴の鳴りにさながら歌ひ合はすを覺るなりけり。現し世か、神の國か、得ぞしらず、我れ我れにもあらで、我れはた彼れにならで、たゞ〳〵うるはしき樂しき心、晝と夜と、春と秋とを一つにして、とこしなへにこの庭に舞はむ。

清風

西海の波彰

昔て七旬の休暇を、風清き、波靜かなる邊に消さんとし、歩を邊西の孤島に移しき。居は一面海波を受け、一面は山を背にし、老松欝蒼として老鶴を樓はしめ、庭石は苔蘚を帶びて池面萬龜を住はす可し。草葬翠を湛へて、紅花更に紅なり、甘果滋々として枝葉爲めに垂る、蟬聲樹間に渡りて夏の深きを告げ、細聲の妙音を聞きては秋の來るを悟る天然界の變調に依りて天環の移轉を知る、或は樓上脚下を眺むれば碧海廣茫、海波洋々として白帆を浮べ、點として白鷗の遊ぶが如し、

汽船煙を揚げて奔りて行跡を留め、水雷艇の靜かに波に乘りて進む樣の長閑けしや、知らず四海暗黑にして視眸を遮らざる時に於て、遙に波上を望めば漁火熒煌海上を照し、煌々として玻璃球の漂ふが如し若し月明に乘じて庭前を逍佯し、天然の光景に接せば、白露は玲瓏として、白珠圓なり、欄に凭り月下に放吟すれば氣宇自ら弘大、玉鏡愈々圓なり、誰か云ふ孤島の月と、月を以て斷腸の主物となすもの古來之あり。

月見れば千々に物こそ悲しけれ
我身ひとつの秋にはあらねど

又曰く

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

と之れ古鄕愛戀を歌ひしものに非ずや

然れども月は必ずしも憂愁を寄するものに非ざるなり。

かつ見れどうとくもあるかな月かげの、
いたらぬ里もあらじと思へば　貫之

實に、月の妙靈なる天施の閃々たるに至りては歡愁兩ながら着けずと云ふ可し、所謂月の月たる美精は玆に在るなり、

一種月團圞
照愁復照歡
歡愁兩不着
清影上欄干　許宣嫋

鄕思

『ャーンレー楫を枕の夜毎の夢に、通ふ妻子が面影も、古里遠き浪の上、汐の雫か、涙の露か、啼くや千鳥に文ことづて、無事に暮せよ

たのむぞ無事にャーンレン頼むぞ無事に！』とは之れ霜夜舷頭に突立つて、錆びたる然かも熱心なる餘情ある聲もて、冴渡る月光を總身に浴びつゝ唄ふ漁夫が繰言なり、我れ妻なく勿論子なし、然かも我が故郷父母を思ふの戀情に至りては更に切なるものあるなり。

嗚呼故郷！何か故に戀しきか、知らず一種のインスピレーションに支配せらるればなり、言狀すべからざる痕跡を留むればなり、蓋し愛泉の混々として盡くる事なければなり、郷思、之れ他郷にありて下す一種の代名詞なり誰か猶愛々として慈母の膝下にありて、暖かき夢を結ぶの時に於て其の情思を漏さんや、嗚呼是の情、獨り吾人のみならずやは、英雄猶且つ郷思の涙あり、不識庵嘗て月明に乘じ中秋宴を七尾城頭に張る當時詩あり。

霜滿陣營秋氣清　數行過雁月三更

越山併得能州景　遮莫家郷憶遠征

鬼神哭し、落葉聲あり。

落籠一片

梅谷氏は我が舊知の人、嘗て西海に客たりし時夏期茲に寄遇す、氏の藏する所の書畫中特に秀づるもの多きを聞く、春畫を深く藏して容易に人に知らしめず、今古別かるゝに臨みて氏之れを余に示す、開き見れば、艶畫一幅双蝶花を抱きて眠るの情、別に書あり題して、千秋萬歳樂未央、とあり有名の書家、米庵の筆となす、之の好對の書畫は始め屏風に造りしものなりしが、保存の爲め之れを藏めて卷物と爲せしなりと、人多く之れを望むものあれど嘗て之れを見せしめざりしと。

片帆不掛一雙舟　萬山千山載得浮
層塔長橋有待景　更無世事入吟眸

とは益信の筆に成りし所のもの、其他六十八翁高嶋千春の畫、資愛公の風月軒と題する書、又孤雲齋、片山舟水の畫には天保十年蹴鞠の狀を寫す、其の側に歌あり。

武夫の心をねるはひたふるに、
ゆみやとるにはかはらざりけり。

其他安信の筆としては、寶峯翠巖叟乘輿卒題、として左の一詩を載せたり。

不愛勝幽孤客船　層々更好莫山色
東望西望境無邊　萬里馳心在目前

烈婦と醜婦

一少女妙齢、海堂の雨に困むの風情なきも、亦一個の佳人たるを失はず、齒は已に涅し髪又乱る、裾高くかゝげて敢て他を顧みず、一意其

の夫の爲めに重荷の勞を助く、熱汗頰に滴りて笑くぼ爲めに沒す、攀坂越嶺の苦彼女に於て意とする所に非ず、彼女已に其の夫の爲めに一身を捧ぐ、萬艱爲めに喜迎すべし、千苦寧ろ樂み送るべし、夫婦の間正に斯の如くなかる可からず、之れを彼の路傍身を賣る醜業婦に比するに其の間隔其れ如何ぞや、試に彼れが品性を覗んか、身に一定の思慮なく身に一定の夫なく、猥りに虚飾を施して路人を迷はし金錢を得て、其身を融ぐ一夕背向何回たるとを知らず、巧に言を弄して胸底更に寸餘の實を蓄へず悲むべし。

愛泉

人に依り將た時に依りて其の愛泉を異にせめ、余は常に小兒に對して深き同情と深き愛憐とを持つものなり、然り熱天も之を涸すこと能はず、何物も之れを遮ぎること能はざるべし、唯だ一時其の迸線を斷つ

も源泉の滾々として盡ざるが如く其の支流豈溢れざるを得んや、童子之が爲めに馴れ子女之れが爲めになつく、尚も其の間一點の邪心なし、我れは理性に依りて彼を導かんとし、彼れは天眞の特性に依りて來りて和せんとす、彼れは布ける白露の皎々たるが如く、我れは之を宿す蓮葉の青翠たるが如けん、子女は會する毎に之れを他の聯想に比し時に之れと現實に他の理想の片影に對比す、然かも其の間は彼我高低の境界を爲さんとはせず、唯だ過去の幻想を想起するのみ。

寄病兒

菊子嬢、齡已に二ッ、愛々滴たる其の頰、神の如き笑み、かよはき其の紅葉の手、肥たる其の足を以て起きつ、ころびつ、泣きつ笑ひつ、然かも何等の苦痛なく、我が膝に眠りし事もありしよ、己れ自ら抱寢しつ尿せられし事もありしよ、然るに病の爲めに之のかよわき腕も働

かせず寢れる如く慈母の懷に眠る樣の如何にすげなき事よ、己れ小女が爲めに一句を進めき愛憐の情の溢れてなり

おゝ稚子よ稚子よ。
あはれ優しき朝顏の。
やさしき菊の色あせて。
歌へる母のふところに。
目をば開きてうめきつゝ。
又目をとぢて眠るなり。
あゝ稚子よ稚子よ。
文讀む窓に昨日まで。
來りし如く來て遊べ。
我が寢屋の戸を叩きてよ。

いとしや今日は如何にせし。
其の花よりも美くしき。
ねむれよ〳〵稚兒と。
乳房片手にひねりつゝ。
むづがる聲の其の中に。

哀れや今日は如何にせし。
かよわき足にてとち〳〵と。
朝とく起きてチャー〳〵と。
我讀む文を明日よりは。

穢すも裂くも意のまゝに　來りて遊べやよ孃よ。

希望

明治弍十九年七月十八日、余は滿腔の希望を都に遺して、歸省の途に上る事となつた、實に僕は國を出でゝ五年中學の業を就へて尙ほ進んで高等學校に其の入學試驗を受けたのである、而して今日其の成否の關ヶ原に居りながら、西方に逃るもの豫め敗北と期したからであつたが亦勝利と豫期する程でもなかつたが、此空々漠々の裡に賴みなき希望を抱きつゝ故山の雲に入ると思へば捲土再來の期を造らんとにや。

歸省

簑笠と云ふ打裝で、四面愈々暗きあたり僕は故鄕園野に着いた、田舍の一寒村は何時來ても寂莫たる天地に包圍せられつ、伊勢屋、桔梗屋の店先には、ほの暗き燈火の光が白く班らに道を照らす外は、農家の

雨戸をもるゝ燈火と共に葉をたゝく音のコト〳〵と聞ゆるのみであるゝ、僕は此の寂しき辟村に來る引力は慈愛深き、兩親であると思ひながら勞れ足引ずつて家の前に來た、家では戸を開けて凉んで居た、「只今」と一齊に言つた、其の聲は變つて居つたかも知れぬ、「マー」今頃モー歸るまいと思つたと云ふ母の言葉の外は何も聞かなかつた、洗足して上に登り互に變りなき久濶を語つた、丁度祖母も居合せたので一家團欒の快樂の裡に包まれた所謂スイトホームは造形せられたのである。

幼時の懷想

歸省中の事であつた、余は父と兄と三人で氏神に參詣した未だ朝ではあるが、日は赫々と照り輝きて、さしも靑々たる田野も一時赤らむかと疑はる計りである、道傍の田の中に夫婦でもあらう二人の男女何か

樂しげに話しては時々笑つて居た、僕等は八幡社に祈願をこめ、暫し其處に憩ふた往時の感想かむら〳〵と起つた、其の昔小供の頃村の祭典に下男に連られて兄妹と里神樂見物に來た事、今想起しても一々其の擧動が目の前に現はれるのだ、父の名が村中の最上位に記るされてある事は、昔も今も變らぬが、御神木に人を唄ふ倒人形は無い樣である、其より序に山を見巡ふと父が言出した、僕は後に從つて小川を渡り山に登り初めた、此處ら一帶皆僕の家の持山である、草花など集めながら登つた、遙か南の方には富士山が薄青き、空の色と和して魏然として雲際に聳へて居る、裳は彩色した樣に宙に消ゆ其の樣丁度美人の薄化裝した樣な美觀を呈して居る、山は半腹に至れば今迄見えなかつた、釜無川が現はれた、玉を溶かした樣な美しい水が目先に照返されてキラ〳〵と輝て居る。

其の奇麗な水が南方に段々細く微かに、丸で夢の樣に霞みて見えぬと思ふ所が丁度、不二の裳である、知らぬ者が見たら此の玉の樣な水が凝つて不二山を造つたのか知らぬと思ふだらう、其れに七里岩が屏風の樣に不二の裳を半分隱して得も云はれぬ景色し實に一幅の活畫題

丁度十年餘の昔、小春の好日和、兄弟連立つて西山に蕨狩に來て此處に一しきり狩り集めた勞を休めて、下男が持來た握飯を廣げて、食ながら、向ふの知公や隣りの金公などの遊び仲間がお町に行つたのを「おれも行きたい」と恨んだ其のお町を彼の大きな白壁の家が學校で、其れ其の少し高い屋根は郡役所だなど說明され「ぼつちやん」最つと大きくおなりなさつてあんな町よりもつと〳〵ずつと大きい日本一のお町に御出なさるでさーと云はれて、漸く胸の虫を納めた事があつたが思へば之れも夢なりしか。

夏の月

日は今や西山に隱れ、四邊已に暮靄の裡に包まれ紅雲空に棚引き山腰煙を吐く、藍色に變つた銜、白砂長く釜無川の岸を洗いて碧く、墨繪の樣な駒ヶ岳は今にも滴たらんとする夕やけの雲のかけ橋に取まかれ、空にはねぐらを急ぐ烏の聲の細く高く！行くこと暫し薄布の霧が前に立塞がり拂つても〳〵去り難い頃、十六夜の月は、のぞく樣に七里岩の頭に現はれてオレンジ色の美玉は一時に草葉の上に散した、千草にすだく虫の音は足音に驚いたか鳴き止んで遙か後ろにさゝやくが如く、實に好景、夏の月は又格別である。

雨過ぎて庭の草葉の露の上に、
しぼ〳〵やどる夏の夜の月。

曇りなき雨後の月、青空に群星を伴へる其の月に對しては、一片詩的趣味の發展なからずやは、知らず其の無心の月に對して其の純潔なる白露に對して、彼の嬢々たる蟲音に對して。

後の月

日は西に落ちたれど、朝來の木枯尙止まず、空は洗はれたらんが如く、清く澄み渡りて深し、銀色の月隣の柳の枝より上る頃、椽先の机上には月よりも丸き團子の外、種々の供物あり、實に今日は陰曆九月十三夜一晩饌を終へ宿を出づれば月は皎々として白晝の如くなり、こゝかしこ歩を移して何時しか靖國神社の鳥居をくゝりつゝ、木枯に搖れし萬樹は恰も活ける墨繪の如きを土上に寫しき、吾れは俯して且つ仰ぎぬ、池畔に臨めば池水涸れて餌をあさる鯉魚は音なく、落葉颯々として徒らに聲するのみ、誰がたしなみのすさびぞや、遙か堂宇の南圍より吹き送る風と共に聞ゆる調は高く低く、怨むが如く訴ふるが如く、悲し

むが如く遊士の情致動さなき能はず、あはれ想夫戀の一曲。

あはれ是の月、獨りにて見んは本意なく、心知りたる友の許訪はんものと濠邊つたい土手の上に人知れず罪を犯かしぬ、嗚呼此の土手余はいかで汝を見捨つるに忍びんや、余は汝を愛するなり、夏の夕、團扇片手に水面を通り來る涼風を浴びつゝ、虫の音を語りし事もありき、秋の夜月を仰ぎて故郷を想起し斷腸に沈みし事もありき。

西風尚は吹き荒れて飛雲折々月影を掩ふ、友と共に此の月に浴す、鳴呼秋の月、配所の月に苦を忍ぶ菅公や如何に月は愈々冴へて星は影の如く薄く眠れるが如し、友と別れし我、暫し牛込橋上に佇立せば、月は、取殘されし見附に清く松の梢に宿りて、江戸の昔を忍ばしむ、揚場の船底、篝火二三點、水に映ずる邊、少女が歌ふ漁船の調の微かに聞ゆ、風も眠り天地も眠る。

月影も入る山の端もつらかりき、
たへぬ光を見るよしもかな。

戀と色

戀は美なり、純潔なり、色は醜なり、虚僞なり、戀は自然なり、色は作意なり、戀は冷靜なり、纒綿たる情緒を脱離す、敢て偏向ある感情を容れず、寧ろ絶對自由自主なり、公平無私なり、彼の鳥は其の飛ぶに任かせ、魚は其の躍るに任かす、雲は無心にして悠然として動き、水は潟々として流に從ひ、樹は森々として天に摩して生成す、其の狀や一の矯飾なく一の制御なし、人か、人か、一朝此の自然の靈淑に接し、天空海濶の妙を知るもの、獨り身自然の美中に浴し、妙靈の精神を呼吸するにあり、夫れ色は熱煩なり故意弄巧、勉めて修飾に馴れ、情緒の激發を許す、寧ろ絶對的不能不理なり、偏破虚飾なり、彼の荒

癈せる庭園紛々たる飛雪、破窓の月色、或は、離別、解逅悲憤憂愁等一に粉装的にして一の壓慾虚禮なり、人か人か、自ら其の渦中に投じ、心念を去脱せしものにありては終に又た其の粉飾の裡に埋せられんのみ、二者の懸隔夫れ如何ぞや、彼は白にして之れは黑なり、彼は天にして之れは地なり、戀は限なし、色は限あり、戀は無形なり、色は有形なり、色は肉塊なり、戀は理想なり、色は賤にして戀は尊し、色は地上の泥水の如く戀は溪間の源泉の如し、彼は以て足を洗ふ可く之れは以て纓を洗ふ可し、色は淡なるを可とし戀は濃厚なるを宜しとす、色は粗を以て貴とし戀は密なるをこそ貴しとす、色の極は我にして戀の極は無我なり、色は凡ての罪過を生み、あらゆる沒德に終る、戀は凡ての美德を生じ、善報を配す、實に色は煩惱の犬の吠ゆるが如く戀は天人の妙音を發するが如けん。

戀愛

眞正の戀愛は必ずしも失戀に終るものに非らざるなり。眞の戀愛は亦必ずしも報酬を望む者に非らざるなり、何となれば報酬は美の本領ならざればなり。報酬を望まんとするもの之れ眞正の戀愛を解したるものと云ふを得ず、見よ彼の失戀に泣く處のものを見るに或は齧し或は狂し或は斃る、之れ自ら戀に對する報酬に失敗したればなり、見よ兼好法師、彼れ失戀の爲めに遁せず、當時猶ほ彼れをして其の戀を遂行せしめば彼れ何すれぞ失戀に終らんや、彼れは戀に泣くに非らずして色に泣きしなり、戀を訴ふるに非ずして色に叫びしなり、鴨長明に於けるも等しく仕官を望て成らず、大原山に退隱して世の濁れるを諷詠し當時奢飾婬風の矯正に勉めき、戀愛は無聲なり無色なり、至妙なる清樂の如く、無垢なる天女の如し何等の情實なく何等の秕聲なし、能く

物に合し能く人を容る、宏大無極にして萬能なり、花の如き樂園、滾々として盡きざる泉の如し、其の色美にして其の香高し、其の味は甘露の如く其の光鏡の如し、嗚呼全法界の財貨よりも、大雪山の嶺よりも、大恒河の水よりも貴く、高く、深きものは此の無聲無色なり、戀は神聖にして無垢なるものなり、戀愛は同情に富みて獻身的なり一の要求する所もなく一の感激する所もなし、戀愛は人世の秘鑰なり、莫耶の刀、政宗の刀ありとも、なぞか之れを切することを得んや、戀あり て後人世あり、愛ありて後社會あり、戀愛をして社界の外にあらしめば社界は實に無味膽白に終らん。

歸雁

叔父某任に東海沼津にあり、親しく書を寄せて旅情を訪ふ、余は遠く書劍を携へて西海に客たり、邊陲の地、有明洋の月、萬里客情夢成り難く遊士爲めに斷腸の思あり、寒燈に對して往事を回想すれば思ひ更に切なり、當時歸雁に托して一篇を寄せき、今又顧みて舊情に堪へざるものあり西海の波、玄界の月、今も變る事なきも我が身邊の變調や如何に、あゝ長なり白川の流

東海潮波帶想鳴　天涯客思夢難成
遠寄芳牋銀杏城　行々不堪萬里情

月下遊遊

時正に盛夏、暑氣身を襲うて寢に入り難し、友を語らひ月明を幸期として畦畔を辿り湖邊に遊ぶ、月皎々として星稀なり、行々時事を談じて歩の進むを知らず、湖面に臨めば萬籟悽々として波輕く揚り孤月團々として月影を留め、月は波紋に反射して輝々として珠玉の如し、冷風吹きて湖面靜かに動して二ッの影法師を無心の水底に宿す、熱氣消

盡し爽快云ふ可からず、水の耳語は無心なり、我等の耳語は有情なり有情の者を捕へて能く無心の身底に撮す知らず抜しき所なきか。

照渡る月の桂の影にこそ、
我眞心のほどや知るらめ。

湖其れ能く首肯するや否や、樹間に宿る鳩のポー〳〵と鳴く聲を後にし、湖のさゝやきも後にして再會を約して其の處を去つた、月は一層冴渡りて、まばゆき計り露の路も濕り勝である。

川　獵

夕立は實に馬の背を別けるとかや、實に昨日は、つい目の先の隣村が夕立であつたと云ふ、今日三十一日の晝過ぐる頃には西山の頂から墨の樣な雲がむら〳〵と涌き出で瞬間に空一面に廣がつてゴロ〳〵と鳴出す雷の轟き其れ夕立と乾物取り入れ庭に出た顔に一陣の風は早や大

豆形の雨を打ち掛けた。

鷄が雨にぬれて、ぼんやり軒端に立つて居る。

軒下を傳はる雨のしづくは急がしさうに辷つては落ち、落ちては辷りして居たが、果は一本の小柱となつてしまつた、雨は一しきり細繩下げる樣に降つたが、一時間程過つて、ぉーつと明るくなるを合圖に、雨は小萬して窓から差出す顔に糸雨冷たく、果ては全く晴れてしまつた今迄垂れて居た朝顔の葉は見る間に顔を揚げ生き〳〵として來た、七里岩の美い景色は一層綠を呈し丁度油繪に玻璃を添へた樣だ、今夜は叔父にねだつて、小武川に漁獵に行く約束をした、君子のせぬてふ網打である。

六時頃冷飯かつこんで僕は叔父の家に向つた、叔父は丁度飯を喰ひ終る處で、早速出掛ける事となつた、其時叔父は僕に布呂敷包を渡した、

手に取れば温である、何であらう、僕は只唯々として從つた。

今迄清んで居た水は急に濁つて來た、此は晝間の大雨の影響が之の下流に及ぼしたのである。

「此れや駄目だ」叔父は獨り言の樣に然かし聲は大きく言つた、叔父は此の道に掛けてはかなりの年功者で在るから、僕は其の言葉を信じた、果して！叔父の言が當つたのであらう砂防の瀑布まで山の角を何曲りしたか知らんが、魚籃には數尾の小魚が横はるのみであつた。

石に腰掛ながら叔父は煙草を吸ふ、僕は命ずる儘に携へ來た風呂敷包を開いた、何であらう！小麥の御手製パンである、僕は月をかてにして其の半ばを殘して饑たる腹を滿した、ひもじい時に、まずい者なしと思ひながら、僕等は又一しきり川を遡つた時々川を渡つて、河風が四邊の冷氣を含んで吹き來り晝間の儘の身仕度では心細くなつた、漸

く魚籃の底が隠れる程になつたので、勿論いつもの四分の一にも足りないのであるが、此も不運とあきらめて再擧を期して歸路に就いた。

トある大石の上に殘りの糧食を喰ひ盡した。

餘り好き月なので石に身をもたせつゝ放吟放歌を擅にした殘月滴露、何度僕の口にかゝつたか知れぬ。

此處は、村の若者が草刈に來て草束の幾個を河の中に落したり、山からこけ落ちて顏に砂利をめり込ましたりする、象が鼻と云ふ所ださうな。

此處迄道の兩側に權木が生い茂つて蜘蛛が縱横に巢の網を張つて、時々首を取らるゝ事があるので、何度か蜘蛛を喧がしたか知れぬ、一時半頃には叔父の家に魚を燒て居た、茶を呑み渴を醫して二時に家を辭した。

さすが草木も眠る時刻で、村は皆な死したるものゝ如く、只僅かに、

こふろぎの憐れ氣に草の蔭にかこつが如く鳴いて居るのみ、此の寒村の眞夜中にも獨り月は皎々として遺憾なく見守つて居る。

他郷の月

他郷の月、如何に物憂かりしよ、如何につれなく感ずるぞ月無心なり、汝に罪なし、我に罪あり、汝は常に皎々として四時變る事なく、村雲之を覆いても怒る所なく悠然として其光を失はず、汝の罪に非ずして我の罪なり嗚呼此の月如何に旅情をして冷からしむるぞ、窓を排して中天を望めば、孤月團々として乾坤を照し萬目轉た悽々の感わらしむ去つて池畔に對すれば、水烟模糊として揚り四壁を壓す、心情亦冷然たるの時、杜鵑の一聲耳朶を掠むるも憂し、杜鵑一に不如歸と云ふ、知らず我が郷に歸るを促すか、將た我が自警を勸むるか、あゝ月と杜鵑、如何に悽寥たる悲調に沒するや、月の明、杜鵑の想、何ぞ我等遊士の心緒を苦しむるぞ。

馬琴の晩終

馬琴は天下の名士なり、文人として將た一の理想家として、優に天下の重さを爲すの士なり、現時の文壇亦多く彼れが指屬に負ふ所あるを疑はず、翁晩年に至りて盲目し自ら採筆する事能はず、其の子に命じて書せしむるに至る時歌あり。

ながらふる甲斐こそなけれ見えずなりし、
書卷川に猶わたる世は。

と猶其の採筆せしむる事の自由ならざるに至りてや、

筆捨の松のふる葉も言の葉も、
子等におしへてかゝするぞ憂き。

其の最末に於て左の一歌を殘せり之れ八犬傳全局を歌ひしもの

世にわびて身は隱れ蓑かくれ笠、
あだなる名のみ手出の槌。

多田羅濱邊

多田羅濱邊が名兒童已に之れを口にす、本邦歷史に於て最も印跡の深き處、即ち其昔忠勇義烈なる鎭西の武士が國難に殉じて屍を沙上に曝したる所なりき、今や秋草茫々として只だ、海水岸を打つて韡韡の聲を聞くのみ、岩頭海中に突出し海水之に激して淙々として飛沫散じて雪を吐く所は即ち帆柱石と稱す、圓圍丈餘、木理猶明かに辨ず、神功皇后三韓征伐より凱旋の當時以て之れを船帆に供せしものなりと、多田羅に近く香椎の神社あり、境內廣濶にして社頭に老杉あり森々として空を壓す、之れ勅使御手植の稜杉と稱す、故陸軍大將熾仁親王宮の書にて古歌を上りしものあり、石に刻せらる。

千早振香椎の宮の綾杉は、
神迺みそぎにたてるなりけり。

故北白川宮殿下御息所の詠じ玉ひし御歌

この神の過ぎし昔を忍びつゝ、
あはけば高し綾杉のかげ。

雨の一日

朝起き出でゝ揚枝つかひつゝ、朝風に吹かれつゝ褪せはてし庭の櫻を眺むる程に、はら〳〵と小糠雨降り出しぬ、朝饌を終へて學校に行かんと、高下駄に雨傘携へ出でぬ雨は竭むべしと從弟の云ふに、暫し椽先に腰打かけて空の模樣を視えど雨は尙やまず、時の遲るゝまゝに、しぶ〳〵と立ち上りて門に出づれば雨は絹糸の如く細りて邊り一面明るくなれり、大降りはあるまじ蝙蝠傘にせんと、五歩又五歩立ち歸れ

ば又もや雨と共に黒雲は頭を掩ひぬ。

烏の噬と鳴きて靖國神社の彼方に隱る。我が意志の弱きを嘲けるが如し。

惡魔の如き黒雲、外道の如き白雲、ふは〳〵と横行すれど日の神の御前に立つ事能はざりけん、或は消え失せ、或は逃げ去りて、やがて青空仰ぐ身に、惠みの光を浴びたり、心弱き我れも其が光を浴びて心自ら清々しくなり行き、躊躇ふ間なくて二三町過ぎ來し路を我家に走せ歸りつ、傘は包に、高下駄は薩摩下駄に、後れし道を急ぎぬ。

意地惡しき惡魔も日神の御前に慚愧の涙をふるひたりけん又暫し雨は我が援けなき身をなやませしが學校に着きしは之の青雲と變じて、日の光は赫々として照り、空に妖雲の棚引くなく、窓に差入る日の光に濕ひし着物を乾す。

三日月艇

さる稚兒の我に向ひて、船造りて賜はれと云ふに、船造ること中々の業にあらず、我がにぶりし腕にては、とても造らるべきにあらず、そは思ひ止まれかしとさとせど聞かず、強ひていなむも、すげなければ、ボート一隻造りて與へつ、三日月と命名しぬ。

三日月艇の歌

一

滿ちては缺くる望月の、
浮世をめぐる小車の、
望の光仰ぎつゝ、
はかなきさかや空蟬の、
めぐり〳〵て限なき、
人は行なりいつまでも。

二

人は行くなりいつまでも、
望の光遠くとも、

たどり行くなりとぼ〳〵と、
千里を行くに難からず、

三

牛の歩みはおそくとも、
重き希望を背負ひつゝ。

重き希望をせをひつゝ、
運が微笑む彼方をば、
ひるむ事なく進むべし、

四

鐵の心を抱きつゝ、
アルプス山の木枯も、
天津乙女が招くとも。

されど若者心せよ、
山の始めは一塊土、
誰か一滴のしたゝれに、

五

海の始めは一しづく、
誰か一塊の土くれに、
心置くもの有るべきや。

心置くもの非ざらん、

學の庭にいそしめる、

汝が牙の上も似たりけり、
三五の宵の成効を、

六

笑めるが如き三日月の、
期するが如きに非ざるか。

期するが如き者なれど、
心の慾に襞を着せ、
比しなば是ぞ成効の、

榮華の夢に耽るなよ、
己が智識を三日月に、
秘訣のひそむ所なるらむ。

婦人の理想

日本婦人の理想極めて淺薄にして、嘗て一定の進路を求めず、只だ情人の愛を求むるを以て其の天職を盡したらんが如く考へ、家庭の圓滿子女の愛育等に附ては凡て顧みる所なきが如し、姑を見ると蛇蝎の如く、姑なき家に嫁するを以て最大の能事と志し、幸運を得たるものと耦せり、勿論姑と嫁とに於て時代相異なるを以て彼れの一笑は是れの

一苦を買ふことあるべく、之れの欲する所は彼れの排する所とならんも之れ不得止ものにして豈獨り日本のみに於て見るべき潮流ならんや、如何なる世如何なる代に至るも時代の差異より生ずる意見の衝突は免かれざる數なりとす、然るに本邦婦人の多くは愛を多數の家庭に求むることなくして反つて情人相互の寂寞たる天地に求めんとす、然からずんば氏なくして玉の輿に乗らんとす、己れの品性を誤解し其の天職を忘る、他に嫁しては唯々とをして奴隷的境遇に投ぜらるゝもはずず、斯の如くにして能く一家を保ち廿世紀の新舞臺に於て其の逆潮に乗ずる事を得るや嗚呼難哉現時日本の婦人。宜しく舊夢を破り新曉に歌ふの覺悟なかる可からず。

迷信

迷信は何れの世、如何なる國民に於ても見る所意志なり之れ畢竟意志の薄弱より來る所のものにして、確然たる意識の下に於ては嘗て迷想に落ることなかるべし、人其の逆境に立つ時に於ては其の爲す所企つる所皆な畏懼の念に馳られ、戰々として薄氷を蹈むの觀あらしむ、故に事に當りて斷乎たる決心に乏しく、一定の意志の表示を爲すこと稀なり、迷想は迷想を生み、正しき心も黑雲を以て被はれ、眞理も爲めに邪說の裡に埋沒せられんとす、況や其の意志弱行にして一定の見識を欠くものに於てや、世の愚者彼の賣卜に訴へて己が目的を立てんと欲す、何ぞ其の誤まれるの甚だしきや、事業は己が意志の進向に依りて成効を期せらるゝものなれ、他人の意志に依りて我が意向を判斷せんとす何すれぞ其れ能く誤り無きを得んや、他人に依りて其の目的を謀る己れ既に意志なきなり、本識なきもの何ぞ能く事に當らんや。

赤旗

赤旗は赤の標示なり、赤は赤旗の表證なり、赤は如何に萬彩の表に立つよ、「わゝ旭日ににほふ山櫻」、如何に其の花の紅なる事よ、見よ彼の眞心を表はすに「赤き心」と云ふ赤き心は天眞爛熳として花の如き又皎潔として眞如の月の如きを現はすものなれ、赤は亦た物の基點に擬かる、地球に於ては赤道を基點とし、人の初めて初聲を發するや稱して赤子と云ふ、赤は斯の如く元子を意味する如く凡ての優勝者、博愛者の好模範たり、彼の平家が全盛列ぶものなく、飛鳥を落す勢力の下には赤旗の風に靡くを見ずや、若し夫れ敵國干戈を雜へし時に於て、病兵を看護し、傷者をタンカに運び、卷くや繃帶白妙に衣の袖を赤に染めても猶ほ敵、味方の區別なく見護る赤十字社あり、あゝ之れ博愛者の標證に非ずとせんや、近くは墨堤に於て大學々生が赤旗の下に一大凱歌を奏し、三度び其の優勝を祝せしを知らん、赤旗の下由來、勝者集

まり、博愛投じ、赤子なづき、鬼神伏す、赤旗の名聲又高きかな、嗚呼神國大和の男子、旭日旗を以て其の魂となし其の精となせり、神州は皇統の連綿たる處皇威の振張不朽たる處、實に之れ旗の靈なるか、將た又た旭旗の德なるか。

忍ぶ戀

或る折の事なりき、己れ三人の友と四方山の話しに時を費やし、腹の饑たるも知らで打過ぎけり、日限思はぬにはあらねども、及ばぬ戀のそれも成り難く、あだに眺めやりき、今日友にすつぱ抜かれし事のはずかしさよ、あはれ今一時を過ぎなばとは思へど、腹の虫は中々に承知せず、罪とは思へど、ぬき足、さし足して軒に掛けある、つるし柿の下に辿りしが、折から家婦に認められ、あはや目的も水の泡と消えし時のいかに苦しかりしか、其の夜の事なりし、下婢の盆に堆く盛りて

差出すものあり、見れば

忍ふども人もつられてあふ坂の、
せき路のかきをこえて來ぬらん。

朝な夕なみるに戀しきつるしかき、
とけてあふ夜はふところにいれ。

と

己れつたなけれども返し文參らす
あふ坂のせき路のかきはしげくとも、
越えではやまじ忍ぶ思は。

思ひねの夢にもかよふつるし柿、
今日の逢瀬を見るぞうれしき。

病院の改良

病院の改良とは改築を意味す、依て起る可き種々の弊害は暫らく置き、其の建築の不完全なるに至りては驚くの外なし、唯だ私利に走りて一時に多數の患者を收容し、嘗て適當なる保護を設くる事なし、限ある人を以て限なき需要に應ず勢ひ不規律に流れ、怠慢に陷るは數の免がる可からざる所となす、近くは東京大學第二醫院の燒失の如き一見慘靡に悶ばしめき、世の模範たる醫院にして猶ほ斯の如し、一般の營利病院に於ては其の不完全なるは亦明けし、思ふに病院は社界に於て最も憐む可き、悲む可き不具者を收め在るものにて手足の自由ならざる、意志の薄弱なる、神經の過敏なる、所謂る吹けば飛ばんとする青顏の集會所なれば、彼等をして滿足に安全に平和に愉快に治療を受けらるゝ望みを抱かしむる事は、最も至當なる方法と云ふ可けれ嗚呼慘事！又々京都舟岡精神病院の燒失を耳にす、何たる悲觀ぞや、病者中生なが

ら燒死するもの十有餘名と聞く、彼等は或る病氣の爲めに常識を失ひ父母兄弟あるも知らざるが如く、最愛の妻子あるも顧みず、只だ〳〵一命を醫士の手中に任かせ、病院を以て己が再生の住家と見做せるなり、然るに建築の不完全、注意の不行屆よりして終に之の慘事を現出す、何等の狂体ぞ當局者は何の面目ありて病者に面せんとするか、將た何の辭を以て白骨を吊はんとするか、出火の如き之を天災と云はゞ云へ猶保護の途なきに非らざるなり、然かも一病院にして一度に十餘名の犧牲者を出すに至りては徹頭徹尾之れを當局の責任に期せざる可からず、あゝ改良すべきは之の冷靜なるホスピタル、暗黑なる病室なり。

目的と手段

人各々目的あり、又手段あり、決して手段の爲めに目的を誤るべからず、又決して目的の爲めに手段を誤るべからず、手段の奴隷となる勿れ、手段を便乘して進行すべし、常に目的に向つて大活眼を開け、目的は一なり、手段は多岐なり、目的を得んが爲めに或は目的を達せんが爲めには所謂あらゆる手段方法を講せよ、決して小事に躊躇すべからず唯だ目的に向つて進浸せよ、手段に向つて目的を混同すること勿れ。

傳染病

世人、傳染病の恐る可き惡む可きを知る、コレラ、マラリヤ、チヅス赤痢等に對しては上下共に其の防壓に勉め寢食を忘れて之れが豫防の策に從事す、元より然り國家衛生上是等傳染病に向つて適當なる處置を講ずるは最も必要にして且つ最も大切なる事なりとす、知らず慢性傳染病たる彼の肺病に對しては世人は餘り無頓着に過ぐるの觀なき

か、前の傳染病を恐るゝ彼が如く、獨り之れに對して平然たるは何故ぞ、宜なり其の浸潤慢性にして直に其の身體を犯すことなければなり、彼の蒼白柳の如き人を見ては「あはれ肺病なり」とてしらぬ顏して打過ぎぬ、疾者自身も一度肺患に罹れば萬事休せりと爲し、又他事を顧みず、彼處に一日此處に一日と日を費し、排出物は至る處に散布す、嗚呼又危險ならずや、斯くて之のバチルスは人体に寄し慢性を以て其の体軀を犯し終に其の命を破らざれば止まず、獨り然るのみならず其子孫に遺傳し永久病氣の占領に委せざるを得ず、空しく志を抱きて死を待つのみ何ぞ其の病の慘たるや、彼の虎拉刺病の如き、チブスの如き之れ一時の經過にして適當なる處方を爲さば直に治癒し痕跡を留むるなし、從つて之れを子孫に遺傳するが如きは夢にだも知る能はず、然るに世人之れを恐れ敢て思を前者に及さゞるは何ぞや、勿論

肺病は根治の症と稱す、然れども其の始めに於て適當の注意と適當の方法を講ぜば充分なる快氣を見ること之れ學者の定論なり、愚なる哉世人自ら其の病を求め自ら其の火中に投ずるや。

函嶺の晩夏

僕等は國府津に下車して、電車に乘り替へた、左に青海原を眺めて松並木の間を涼風に吹かれつゝ走る時の心地、浪は磯邊の砂をなめて、白いレーシの綠を取つた樣な實に好い景色である。胸は何となく清々しくなつて、汽車中の暑さは何處に行つたのやら！

鐵道唱歌にある酒勾、小田原も來て見れば、案外見劣がして、文明の利器は早雲の昔を問はんとする僕等を遠慮なく運び去つて、五時半過ぐる頃は湯本小川屋の二階に旅裝を改めて居た。

翌朝宿の主婦の敎ふるまゝに、玉簾の瀧に浴しさ、さまで壯嚴と稱す

べきにあらねど、緑色濃として滴るばかりの樹間の裸岩より降り落つる其の水の清さ、實に碧の玻璃の滴れと疑ふ計り、雪と見まごふ泡沫は泡沫と戰つて霧を生じ霧は虹霓を呼んで其奇觀さ、あゝ着色寫眞が有つたればと、我知らぬ風流の口の關所を逃げ出すのであつた。

其處の樹間、彼處の池邊は、さなきだに秋風立てる函嶺の此の一佳園に余等の心は何となく澄んで、恍惚として暫し彷徨たが、飽き足らぬ其の景色、ベンチの獨占も顧客の妨げともやと、寫眞一葉を名殘のかたみとして園を見捨つ、水力發電所に參し、かくまで強き水力、飽まで廣き其の功を歎稱した。

湯本の宿に餘る冷を買ひ、暫らく神を、蘆の湖畔に養はんと思ひき、足はトボ〳〵として坂路を攀ぢつ、空は曇つて居たが人力車に乘るでもなく、さりとて駕籠は尙の事、只親に貰ひし足にて山河を一脚の下

に蹂躙せんと企てき、塔の澤も過ぎ大臣を客と嘲る、宮の下も心の目を眠つて過ぎた、向ふの山の端をかすめて飛んだ雲は終に雨を降らしつ、底倉、小涌谷を雨景の中に眺め、硫氣迸る蘆の湯に兎に角もと足を延した。

雨に足止されて外出もならぬ我等は此所紀の國屋の二階に無聊を慰むる一の物をも持たぬ、「常宮、周宮樣か御成りになりまして……」と自慢氣に物語る下女は膳と共に下つて、あはれ好敵手を失つた謙信ならねど我等顏見合せて默然たる事稍暫し。

名物、ひさく姥呼び入れて土產物の數々、からかいつゝ費やす數十分に飽き足らで、らちもなき浮世話持出すも時間を殺す臨機の計謀、此れとても長くと保たぬ紙張の城で、今は百計盡き果て城を枕の其ならで枕を呼んで暫しは華胥の夢を結びつ、窓より吹き込む涼風に榮華の夢

を破られて不圖眠を醒せば、日はいつしか暮れ、恐ろしかりし黑色の雲は、花やかに香ふ夕燒の雲と變じて居た。

「天氣は大丈夫」と給事に出た女を相手に、文殊の智惠を絞りて作戰計畫をした、翌朝の七時、尾花か袂に宿る露を拂ふて假の宿りを立つ、曾我兄弟の墓前に、十有八年の艱難、函山と共に香ふる其の功を想起し、密かに袂をしぼつた。

賽の河原の石地藏も兎角、名所圖解を對照し、細けれど障りなき道を辿りつゝ秋風吹く此の山頂の朝景色に浮かれつゝ、足もとの小石につまはじきさるゝ事の幾度なりしか。

左に蘆の湖を望みつゝ、敷石傳ひ老杉深々として又蒼々たる暗き迄、生茂る權現の社前に、利生を願つたのは丁度九時頃であつた、堂宇の荒癈、土台の腐れと共に人の心も腐れるのではあるまいか、我れは何

となく、すまぬ心地がして、常宮、周宮兩殿下、御手植の松も無言に拜して社殿を後ろにした。

後ろに我か名を呼ぶ聲がして、ギョッとして振返れば社殿の屋根に烏が啞々と鳴いて居るのである。

人間として神の御前に罪の無い者はなからう、花を手折つても罪ではあるまいか、僕は逃る樣にして元箱根も過ぎ箱根に向つた。

夏宮（サンマーパレース）、を拜しつゝ脚は湖畔の漣波に洗はれて居る。

千代を壽く、常盤の松の綠の中に埋れんとして尙其の高い屋根、高い窓、旭日に反影する其の美觀宏壯、……いや是れは僕の目、僕の心の誤かも知れぬ……どうして此が宏壯であらう！世界强國の中に加はる、我が日本國皇帝陛下の御用邸ではないか。

湖畔に立つた我等、夏宮は一直線に見らる、綠の木の間を縫うて赤色

のちら〳〵見ゆる樣のけだかきことよ、僕等は仰ぎ見て且つ頭を下げた。

青々たる、芦湖の水は眠つた樣に靜かで、水中に映する空や、向ふの山が判然と鮮かで丁度硝子窓から窺く樣である、湖心の彼方に、鷗の樣に白く見ゆるは、姥子通ひの船であらう。

砂を鳴らして來る者がある、振返つて見れば此土地の女であらう、跣足のまゝ徒取上げ、まぶしさうに湖心の方に見とれて居た。

「あの此の船は何處の船かね」と僕は岸に上られた新らしい船を指して斯う云ふと、「それですか其れ私しんとこのですが……何ですかアノ漁にでも……ハヽ只だ漕ぎ回るのですか……其れにしてもちと大き過ぎてホヽヽ其れに出すにも二人や三人では……と」彼女は微笑ながら僕等の腕を氣遣つた、僕は早くも四五間先きのボートを指して「あれ

は！」、彼女の返事を待つた、「あれは異人さんのですから駄目です、中々貸しません……」異人とは赤髯を指すのである、彼は之の山頂に横行つて三十年前未開と侮つた此の函嶺に珍らしく無くなつて堂々帝都の眞中に買物する愚はせないと同時に其の宗教は廣く布教して、權現も徒らに寂莫を守る樣になりはせぬかと氣遣はれるのである。

僕は暫時不快の感に打たれた。

其時夏宮の陰から一隻の漁船が現はれた、段々此方を指して來る樣である、僕は何の船であらうかと迷惑も打忘れて問ふた、彼女はさも嬉しげに話し出した、「あれは私家の漁船で主が今朝から……あの昨夕下げた針を上げに……私は只今迎ひに來たので御座いますよ、いえ何にそんなに漁れませんの、春ですとね！丁度五月頃、—岸へ寄て來ますのを網で漁りますと隨分澤山の獵があります、主人か漁りますのを

私共が家にて三日三夜も燒き通すんですが最ふ、しまいには油で醉つてしまいますの、」船端に腰掛けて聞て居つた僕は尙ほ聞き足らぬ心地して「何か漁れるの」と問へば「今丁度赤腹の時節で御座います、赤腹は腹が赤いので隨分美味御座います、大きさは左樣で御座います、五六寸から一尺位上もあるのがあります……」尙ほ何か語り出でんとした時船は丁度我の等前に止まつた「漁れましたか」彼女は懷かしげに其の夫か顏色に見とれて居たが、やがて船の中を差のぞいた、續いて僕等も……」

中には白赤打混りて幾百の鮮魚、船底に横はり潑溂として躍つて居る、「隨分！」僕は思はず口をすべらした、男は誇り顏、女はいそ〳〵と我家に運ばんと魚籃の一を持つた。

食へたら……一人言の樣に言ふたのを女は敏くも聞附けて「煮て上ましやうか！」「眞正に」淀みなき彼女の言葉に疑も晴れて、宿外れの小さなる漁家に、昨日の鯛よりも甘いと彼女が手の料理の赤腹を味つた、腐ても鯛、駿馬の骨を買つた例を引いた淸少納言も少と悟つては居るまいか。

石を壘んだ嶮路坂道は是れぞ箱根に殘る、かたみの一である、谷は深く水淸し、雲助も昔の夢語りとなつて、空飛ふ鳥、草叢にすだく虫の音も明らけき泰平を歌ふのである、

當世ハイカラ坤士の籠に乘りて過ぐるも見へた、箱根山籠に乘る人擔ぐ人、

須雲川に沿ひ畑宿を過きて再び湯本に浴しき、

歸京！、如何に我等は惠み深き函山の天地に其の羽翼を延ばせしよ、

溪川に對しては熱煩せる腐腸を洗ひ、湖心に對しては、心の塵を磨き

しよ、あゝ自然の天地、山は秀で水は環る、鳥歌ひ虫鳴く、天極の美觀、心神快達、飛龍天に翔らんとす

*　*　*　*　*　*

翌日午前九時の電車に乘らんと停車場に奔せ附けたが、車は發してない十時も十一時も、今日は常宮周宮兩殿下東地御歸京なりと云ふ、僕等は神々しき兩殿下の風采に接し遙に拜するの榮を得た、別仕立の車の内、兩殿下は多くの御用掛、御養育掛の扈從の下に、いと御滿足に御發車あらせらる、僕等の車に乘た時は已に一町餘の青田の間をすべる樣に走つて居た、一時何分國府津發の滊車が大磯平塚の各驛を通る時、小學校生徒數百名列を爲して、千代を壽く、君が代の唱歌を歌つて居た、

綠蔭

望郷　武陵生

物の哀れは秋こそ優れと古人の言いけむ言の葉、實にさる事ながら、昨日今日咲きほこる櫻花の、一片二片、音なく散るも哀れなるに、折からの春雨しと〳〵と、軒端を叩たきて咽ぶ、が如きを聞きては、我が腸九回の思ひすと、音づる雁の音は無くとも、臘に霞む月に對して、故郷を忍び、思はず眼を雲らすなりき。

あはれ故郷！如何なれば汝は我れを斯く深き思ひになやますぞ、さなり父母の愛は限り無く我れを招けばなり。

實に物思はしき春の夕、想を過ぎにし空に馳せなば幼な遊びの山河、現の如く我か乱れし頭腦に流れ込みつ、嗚呼歸らんか不如歸雲間に血

を吐きて去れり、歸りて清風に穢れし汚体を洗はんか、噫吁されど我が身は沖の孤舟なり、空しく欝を拙筆に驅つて故郷の風光を呼ばん哉。

小止みせし春雨又もはら〳〵と降り來れり、あはれ故郷も花の盛りならんを、池の汀の櫻花是の春雨に色あせめ、一輪二輪散る花辨！おゝそれよ、小池の面の花摸樣、緋鯉眞鯉の餌と思ひてか爭ひ浮き上る其の樣を、少さき手打ちて嬉こびしはそも誰れなりし？。

長閑けき日和、若草萌ゑ出づる頃は、兄妹打連れ手籠提げて、菫たんぽゝなど咲き競ふ野面に、蝶の花に戯むるゝが如く、終日をあきたらず暮すなど、戀しきは昔の春よ。

我が家の裏垣に根せる竹籔の中に立てる欅の古木二本、此邊十數里が間に聞ゆる大木なるが、春風を得て若葉を副ふる頃世は青葉の世となりて、東を流るゝ釜無川獨り白く、其れに沿ふて立てる七里岩壁の如く、杜鵑花、藤等咲き出てて、さながらの繪屏風を見るが如かりしも、最とおかしき眺めなりしか、

厥採りなどおかしからぬかは、心置かぬ友數輩と下男打連れ、西向山の頂きに取り聚めし獲物は少なくとも、携へ來し重打開らきて、柔らかき草敷きて、箱庭の如き村、リボンの如き河を眺めつゝ食する時の如何に樂しく長閑なりしよ、

しでのたをさの鳴く頃、田植も過ぎて螢飛で、蟬鳴く頃は蟬蜻蛉追ひも興なくて果ては小川に釣糸垂れて數尾の獲物を晩饌の膳上にす事もありき、

水は此の地に名物誇るもの〻一にて、山より谷より、さては庭木の根方より、滾々と湧き出づる玉とまがう其の水は如何なる旱天にも盡く

る事なくて、氷のごとく冷たきは旅人が呼び物の一なりしとぞ。

田に灌そぐ水、水車回はす水、女が洗濯の水、若者か泳ぐ水に至る迄、皆此の清き水にて、小魚が走る樣も見得可きなり。

夏祭りに御輿練り行く、盆祭の夜、若き男女が手踊り、鄙には最となまめきたるものなれ。

漸く夜寒となる程に、野も山も色つき始めて、數旬立ち盡せし案々木、足を休むる頃は、黄金色なせる稻穗は刈り乾され、其か稻の俵となりて、藏に積まるゝ頃、人は豐年を祝し、世は冬枯れの景色最と哀れに霜は松柏をのみ殘して萬山皆紅の世と化し去るなり。

冬の夕、日は已に西山の頂きより與へし最後の光線を名殘に、さらぬだに物寂しき冬の寒村は今、ねぐらに急ぐ鳥の聲の微かになり行くと共に暮れて守唄歌ふ小女の聲いよゝ哀れに一村の寂莫を歌ふが如し。斯

かる寂しき冬の夜も、火桶圍む一家の團欒は最と樂しく温かなりき、母の乳房つかみつゝ物語を聞く頃より、余は甚しく話を好みき、是れも或る冬の夜の事なりき、父は我れに物の本讀み聞かせ給ひき、外は暮れ才より降り出したる六花紛々として、天にも達せん辻占賣りの聲獨りさゑて一入加はる夜寒を、母が温き膝にもたれて聞きし事こそ、最とあやしかりしよ、其は或る判官の已のが私の愛にはだされて、あらぬよこしまの査べしたるが、終に露顯して獄に擊ながられけるが、其の妻甚たく耻ぢかなしみて死し、やがて幽靈となりて夫が擊ながれし獄に至り、刀を渡し死して耻を雪がしめたりと云へる話しなりしが、余は小供心にも甚たしく怪しみぬ、そは幽靈なるものの有るもおかしき事ながら、死したるものなどか幽靈來たりしを告げんや、怪しみ且つ問へば、父は斯かる事能くも氣附ししよ、怪しむは無理ならねど此は皆

後の人の作り事なりとさとしぬ、

長き冬の夜こそ我れに限り無き智の温泉を注そぎ込みぬ、實にさなり、故郷の春は我れに早くも神の愛、自然の美を覺らしめ、其が夏は我れに人より強き体を授けつゝ其の秋よ、我れは汝に依りて終生涸れせぬ涙を得たり、人の苦しみを見、人の悲きみを聞きて流がす涙の瀧津瀬は、汝が余に授けし唯一の物なりきよ。

あはれ故郷!!、山より出でゝ山に入る、其の日はよきや短かくも、高峰の月は長く照らせり、其の月よ、隈なく照らす秋の夜、尾花が袖に宿りたる、露に袂をば濕らきつゝ、無心に流るゝ小川邊を、逍遙ふ昔忍びては、嗚呼故郷よ我れは汝を、戀すと云ふをためらはじ、

又も無情の春雨蕭々として、思ひは折きも鳴る柱時計の音に破れて指折り數ふれば早や五更。(明治卅五年四月七日稿)

五月幟

江戸つ子は、さ月の鯉の吹ながし、口計りにて腸はなし、と是れ江戸つ子の眞相を歌ひしもの、されど今や世上滔々此れに類似するもの、數へ來たれば双手を屈して尚餘りあり、是れ皆表裏、言行の一致せざるもの美はしき錦の裏の艶なく、繁華なる町の裏の汚あるが如し、若し其れ美裝せる學生、表裝美なる著書、其の内容の空虛五月幟の腸の如きを見て心ひそかに嘆せずんばあらず。

今や世は實力の世となれり、艶美なる櫻花も、香はしきローズの花に如かず、愛なき美婦は人形に等しからずや、鯉幟の空に飜るを見て、我が眠れる心は醒めぬ。

杜鵑一聲

「おー涼しい……能い心地じやないか」

僕は友なる篠田と云ふ少年を顧みて斯く言つた。

丁度築地の海軍大學の門を入つて、木立の蔭を涼風に吹かれながら、然も七月中旬、日がかん〳〵と輝いて、草木も枯れさうな暑さを侵して、海軍兵學校に入る可く、体格試驗を受けに來たのである。

「能い心地だ」

今其のジャケットの海軍服の釦を外つして、白の日覆した正帽で、胸に風を入れながらオーム返しに友は答へた、汗をぬぐつて、暫し新鮮の空氣を水の如く吸うた。

實に涼しいな、僕は始終こんな所に居たいね！、誰もさうだらうが、僕の暑がりつたら、君も知つてる通り又特別だからね、其れにしても遠洋航海が案じられるよ」

「ハッハ……南洋の航海を案じるには少と早からう」

なに早いもんか、今から三年辱なくも天杯を給はつて、品海の月を見するは、期して待つべきさ、其の時君などはロングサイン、でも歌つて送り給へ、ハ、……」

ハッハー……いや君などには驚いたね、然し君御互に大にやらうじやないか、僕等の責任は實に大なりさね、學問計り出來て好いじやーなし……」

さうさ体計りで通る譯でもなし、ハハ……」

と僕が皮肉を言つたので、友は話しを轉じた。

「ハハマーそなん事はどうでもいゝさ、目下の急務は入學試驗にあるだ、其れはそーと、今日歸りに僕の家に寄つて呉れないか」

「今日――と、僕の家に來ないか、叔母は沼津に行つたし、兄は歸省つちまつたし、小供計りだから……其れとも、君のとこに御馳走でも

あるのかハ……」

「何にそんな事じやないんだ、實はちと聞きたい處があつてね――さうか、其れぢや君の所に行くとしやう」

丁度水交社の入口で海軍士官に會つたので話はとぎれた、水交社の中の黄海々戰の紀念物などがある所を通つて、艇庫の邊りに、木蔭の草原で暫し休んだ。

向ふの松の木の頭から、帆船や汽船のマストが、さもだるさうに動いて、ポーポッと云ふ汽笛迄が眠む氣である、池は死んだ樣に小波一つ立てぬ、右の方では老人が頻りに、首かたむけながら釣を垂れて居る、船も何も燒け上りさうに暑いのに、向ふ岸に繫がつた塗り立てに、白いボートが滴りさうな緣の土手と相映じて、西洋畫見る樣だ、僕等は暫し恍と見惚れて居つた。

不圖一時を過ぎたに氣がついて、惶てゝ試驗室へと急いだ數多の受驗人ががやゝして居る中をぬけて行くと丁度自分の番なので、友と一所に歸らうと約束して別れ、無雜作に服を脱いで、試驗官（軍醫候補生だつた）の前に出た、が頻りに動悸が激しくなつて來たのを、兼て注意されたのは此所と、務めて平氣を裝ひ、身長も無事に通り、体量も十三貫何百目と思つたより餘計あつたので、動悸も稍々平常に復して來た、次が視力だ。

僕は丸木で撮つた、自分の半身の寫眞板で右の眼を塞がれたと同時に、向の白壁の穴に「コトン」と黑い物が入つた

「あれは？」　軍醫は稍温和の調子で問ふた、

僕は何となく眼が霞む樣な心地がしたので、一寸眼を擦りて、さて少し前にのめつて見たが、只ぼんやり黑と計りで分らない、僕は大に躊

躇した。

分らんか、四角とか三角とか？。

僕は思ひ切つたが眼には何も見えぬ、

ハ、四角……です」

軍醫は微笑した、次の目標が出て、

「あれは？」軍醫が云ふた。

僕の顔は熱した、一種云ふ可からざる煩悶が、村々と頭の全部を犯した。

此方（こちら）じやどうか？」

軍醫が寫眞板で、左の眼に代へながら言つた。

僕の眼は已に、二十尺彼方の目標を見能はぬのであつた。

然し躊躇するの不利なるを知つて、運を天に任した。

「A」と判然答へた、が顔は益々熱し、体は氷と冷たくなつた、然し藻掻いても、足掻ても、是れ計りは駄目だ。

「今度は？」

と云ひつゝ、僕の眞赤に熱した顔を見て言つた。

僕の眼には何も見えぬ、再び眼を擦すつた。

「見えるのか、見えぬのか？」

軍醫が少こし慳貪に言つた。定まりかゝつた眼は時々變られ、落着かうとする腦は、試驗員が催促の聲に愈々亂れた。さうして終に默してしまつた。

「宜ろしい」と云つて、寫眞板を卓上に置いた軍醫は、「一寸待つといで」と云ひながら、僕の爲めに十分も待たされた、青年の試驗を爲たが、是れは又苦もなく五六回試みて、大々的好結果で、次の試驗をする可

く奥に行つた。僕は殘念で人が浦山敷て堪らなかつた。

軍醫は僕の眼を診た

「近視眼だ、君駄目だぞ、海軍斷念するさ、」

近視眼ですか？と云つた聲は變つて居た。

近視眼なんで……僕、……知るもんか」

僕は俯いた、兩足はブル〳〵震へる、胸の鼓動は、玄海の波よりも高かつた。

さう、どうも仕方がないねいマー斷念……」

僕は其の餘を聞かぬ、聞かうともしない、さうして僕のもろい眼には、早や不覺の涙が一杯溢れて、一滴二滴、板の上に落ちた、其れを覺られじと、足で拭つて鼻をすゝつた斷念……斷念なんて……」震へる唇は斯く言つた、が後を言ひ得なんで、唇をかんだ。

嗚呼實に殘念、千秋の遺憾だ、自分此の時程悲しかつた事はなかつた。笈を負つて國を見捨た時も、中學に入る時も、又は學年の成績を見る毎に、皆是の勇ましき海軍士官に成らうとしたからで、つまり僕の心は海軍と云ふ虫に喰はれて居た、僕の眼は海軍の外何者をも視なかつた、國に盡くすも、親に孝するも、身を立つるのも、此の外に何も無いと思つた、が僕の心は單純であつた、こんな所に伏兵のあらうとは氣がつかなかつた、友が學問計り出來てもと云つたも此所ではあるまいか。嗚呼其の海軍を今此所で斷念せよと言はれて、何で悲しまずに居られよう、泣かずに居られよう、心弱い樣だが僕は眞から泣いた。例へば、戀する少女が意中の人、其の爲めには命も要らぬ、と迄思ひ込むだ人に、サテ打明けて思ふ事叶はず、身を世もあらず泣くのと同じ、否其れより一層悲しかつたのであらう。

然し自分は何處迄も視張つた、掌で眼を拭いて、頭を上げた眼は軍醫を白眼むだ、

「最う一度、試驗(ヤッ)て下さい」

未練の樣だが、僕は斯う乞はずに居られなかつた、然し結果は愈々惡かつた、さうして友にも告げず只獨り、海軍大學の門を夢中に駈け出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

我が書齋の机上にもたれて、過去十數年の自分の經過を夢想して、友のなぐさめも耳にせず、飯も食はず、して居た僕は凡そ一時間後、英雄が盛衰の傳記を見始めた、英傑にならうとでもなく、其れを眞似て馬鹿にならうとでもないが數日後、我の目的の變更と共に、頭の空は

晴れてしまつた。

ジャパニース スケッチブック 終

明治三十五年六月二十三日印刷
明治三十五年六月二十七日發行

（スケッチブック奥付）
定價金貳拾五錢

東京市本郷區森川町一番地
編纂兼發行者　育成會

東京市本郷區森川町一番地
代表者　石川榮司

東京市本郷區丸山福山町六番地
印刷者　水谷景長

東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　合資會社　博進社工場

不許複製

發行所　東京市本郷區森川町一番地
電話本局二四一四　育成會

女鶴子著

女性征伐

美裝全文色刷
定價貳拾錢
郵稅金四錢

女性征伐は名は恐しけれども其の實は我國の女子教育の弊を矯めんとする正義の筆なり其の目的は

一歐化主義の思想を破らんとするにあり
一守舊主義の迷夢を醒さんとするにあり
一貴族的贅澤主義の弊を拂はんとするにあり
一花柳的淫猥なる女子弊害を除かんとするにあり
一紛裝的諂媚主義なる女子の陋習を退かんとするにあり
一隷屬的倚賴主義なる女子の迷信を戒めんとするにあり

其の筆鋒鋭くして迷の隱るゝところ弊の伏す處偵察せざるなく攻擊せざるなし

此の書を繙かばず忽ちにして帝國女子の眞相及び女子教育の眞髓を悟り又貞淑の何たるかを解し得べし女子教育者は勿論女子を持てる父母も婦女子自身も必ず讀まざるべからざる良書なり

育成會編纂
◉教育辭彙　定價八拾錢　郵稅八錢

本田增次郎先生譯
◉かたみの鈕　定價三拾錢　郵稅二錢

石川榮司編
◉教授資料陸海軍　定價三拾錢　郵稅四錢

法學士淺見倫太郎先生著
◉法制要義　定價七拾錢　郵稅八錢

白井規矩郎先生著
◉女子表情體操　定價三拾錢　郵稅二錢

岡山教授山口三次共著
◉手工科教授法　定價拾八錢　郵稅四錢

大瀨文學士中谷講師共著
◉教授法沿革史　定價九拾錢　郵稅拾二錢

文學士久保天隨先生著
◉醉人の妻　定價五拾錢　郵稅六錢

石川榮司編
◉教授資料國旗　定價三拾錢　郵稅四錢

法學士松浦鎭次郎先生著
◉經濟要義　定價五拾錢　郵稅六錢

雄島濱太郎先生譯
◉ドンキホーテー　定價拾五錢　郵稅二錢

友田吉田伊藤三先生編
◉小學女子遊戲法　定價五拾錢　郵稅六錢

共編　文學博士　井上哲次郎先生
　　文學士　蟹江義丸先生

日本倫理彙編

全部拾卷
定價金拾四圓
郵稅金拾六錢宛

全三冊
定價金五圓
郵稅金百里以內貳拾錢
百里以外四拾錢

陽明學派

熊澤蕃山　中江藤樹
三重松菴　三輪執齋
中根東里　佐藤一齋
大江中齋

古學派

山鹿素行　伊藤仁齋
伊藤東涯　荻生徂徠
大宰春臺　山縣周南
盧草拙

全三冊
定價金五圓
郵稅金百里以內二十錢
百里以外四十錢

朱子學派

全二冊

近刊

藤原惺窩　林羅山
高雨森芳洲　名和鳩巢
大高坂芝山　山崎闇齋
佐藤直方　三宅尚齋
淺見絅齋　山縣大貳
稻葉默齋　會津正志
貝原益軒　尾藤二洲
頼杏坪

折衷學派

細井平洲　片山兼山
井上金峨　太田錦城
獨立學派
合二冊
帆足萬里　三浦梅園

續刊

文學士雀部顯宜先生解說
● マッケン ジー氏 倫理學
定價五拾錢
郵稅六錢

文學士蟹江義丸先生解說
● カント 倫理學
定價四拾五錢
郵稅四錢

ドクトル中島泰藏先生解說
● ミュンステルベルヒ氏 道德の起原
定價三拾五錢
郵稅四錢

倫理學書解說

文學博士桑木嚴翼先生解說
● ミュイア ヘット氏 倫理學
定價四拾五錢
郵稅四錢

綱島榮一郎先生解說
● スチー ブン氏 倫理學
定價四十五錢
郵稅四錢

中島德藏先生解說
● ヂユイ ー氏 倫理學
定價五拾錢
郵稅六錢

文學士藤井健次郎先生解說
● バウム氏 倫理學原理
定價四拾五錢
郵稅六錢

文學士西晉一郎先生解說
● グリー ン氏 倫理學
定價四拾錢
郵稅四錢

文學士蟹江義丸先生解說
● ヴン ト氏 倫理學
定價四十五錢
郵稅四錢

拾貳種合本
上製總クロース
全二冊定價金五圓
郵稅百里以內金三十錢
百里以外金四十錢

文學士深作安文先生解說
● フイヒ テ氏 倫理學
定價四拾五錢
郵稅四錢

文學博士桑木嚴翼先生解說
● アリストテレス氏 倫理學
定價五拾錢
郵稅六錢

文學士蟹江義丸先生解說
● パウル ゼン氏 倫理學
定價四拾五錢
郵稅四錢

續倫理學書解說

文學士友枝高彥先生
文學士蟹江義丸先生
文學士野田義夫先生
文學博士桑木嚴翼先生
文學士藤井健次郎先生
文學士深作安文先生
撰定及解說批評

定價金參圓
郵稅金參拾六錢
分版六冊
一冊賣金五拾錢

文學士野田義夫先生解說
◎パウルゼン氏 社會倫理 近刊

文學士深作安文先生解說
◎アレキサンダー氏 道德進化論 續刊

文學博士桑木嚴翼先生解說
◎ニイチエ氏 倫理主義 近刊

文學士友枝高彥先生解說
◎ロバートソン氏 良心論 續刊

文學士藤井健次郎先生解說
◎ヴントト氏 道德之事實 近刊

文學士蟹江義丸先生解說
◎プレトー氏 國家篇 續刊

文學士松本孝次郎先生解說
●パルドー氏 精神發達の說明 定價四拾五錢 郵稅四錢

文學士雀部顯宜先生解說
●ドラツ氏 心理學 定價五拾錢 郵稅六錢

ドクトル中島泰藏先生解說
●ヴントト氏 心理學 定價四拾五錢 郵稅四錢

黑田定治先生解說
●サレー氏 兒童心理學 定價五拾錢 郵稅六錢

市川源三先生解說
●リボー氏 感情及注意の心理 定價四拾五錢 郵稅四錢

文學士福來友吉先生解說
●ゼームス氏 心理學 定價五拾錢 郵稅六錢

心理學書解說

文學士塚原政次先生解說
●スタウト氏 心理學 定價五拾錢 郵稅六錢

文學士速水滉先生解說
●ビネー氏 人格變換論 定價四拾錢 郵稅四錢

文學士杉山富槌先生解說
●モルガン氏 比較心理學 定價四拾錢 郵稅四錢

文學士塚原政次先生解說
●ルボン氏 民族心理學 定價三拾五錢 郵稅四錢

文學士松本孝次郎先生解說
●チーヘン氏 生理的心理學 定價四拾五錢 郵稅四錢

市川源三先生解說
●キュルペ氏 心理學 定價四拾五錢 郵稅四錢

拾貳種合本

上製總クロース
全二冊定價金五圓
郵稅 百里以內金三十錢 百里以外金四十錢

文學士石幡伊三郎先生
醫學博士吳秀三先生
文學博士桑木嚴翼先生
文學士花澤浮洲先生
文學士五島陸三郎先生
文學士雀部顯宜先生
撰定及解說批評

續心理學書解說

定價金參圓
郵稅金參拾六錢
分版六冊
一冊賣金五拾錢

（八）

文學士石幡伊三郎先生解說
◎レーマン氏 感情生活之原則
定價金五拾錢 郵稅金六錢

文學士雀部顯宜先生解說
◎ドナルドソン氏 腦髓之發達 近刊

文學士五島陸三郎先生解說
◎トルベートモール氏 催眠術 近刊

醫學博士吳秀三先生解說
◎ロンブロゾ氏 罪人心理 近刊

文學士花澤浮洲先生解說
◎ベイジ氏 意志之心理 續刊

文學博士桑木嚴翼先生解說
◎エルサレム氏 判斷作用 續刊

教育學書解說

大瀨甚太郎先生解說
◎シュライエルマッヘル氏 教育學
定價五拾錢 郵稅四錢

文學士熊谷五郎先生解說
◎井ルマン氏 教化學
定價五十錢 郵稅六錢

久津見息忠先生解說
◎フーイエー氏 國家教育論
定價四拾錢 郵稅四錢

文學士大瀨甚太郎先生解說
◎ナトロプ氏 社會的教育學
定價四十五錢 郵稅四錢

黑田定治先生解說
◎ラウリー氏 教育學
定價四拾五錢 郵稅四錢

文學士吉田熊次先生解說
◎デウリンゲ氏 系統的教育學
定價四拾五錢 郵稅四錢

市川源三先生解說
◎パーカー氏 統合教授の原理
定價四拾五錢 郵稅四錢

東基吉先生解說
◎フレーベル氏 保育論
定價四拾錢 郵稅四錢

中谷延吉先生解說
◎ナトロプ氏（へるばるとすたろつち） 教育學
定價四拾五錢 郵稅四錢

篠田利英先生解說
◎コンペーレ氏 兒童智德發育論
定價四拾五錢 郵稅四錢

文學士吉田熊次先生解說
◎ベルゲマン氏 教育學
定價六拾錢 郵稅六錢

波多野貞之助先生解說
◎ライン氏 系統的教育學
定價四拾五錢 郵稅四錢

拾貳合種本
上製總クロース
全二冊定價金五圓
郵稅百里以內金貳拾錢
百里以外金四拾錢

（九）

續教育學書解說

文學士春山作樹先生
文學士大瀨甚太郎先生
文學士吉田熊次先生
高師講師中谷延次先生
文學士八木光貫先生
文學士菊池俊諦先生
撰定及解說批評

定價金參圓
郵稅金參拾六錢
分版六冊
一冊金五拾錢

育成會出版目錄

文學士菊池俊諦先生解說
◎ツ（コロ）ア氏遊戲の心理及教育　近刊

文學士八木光貫先生解說
◎ヨー（ギュ）氏教育と遺傳との關係　續刊

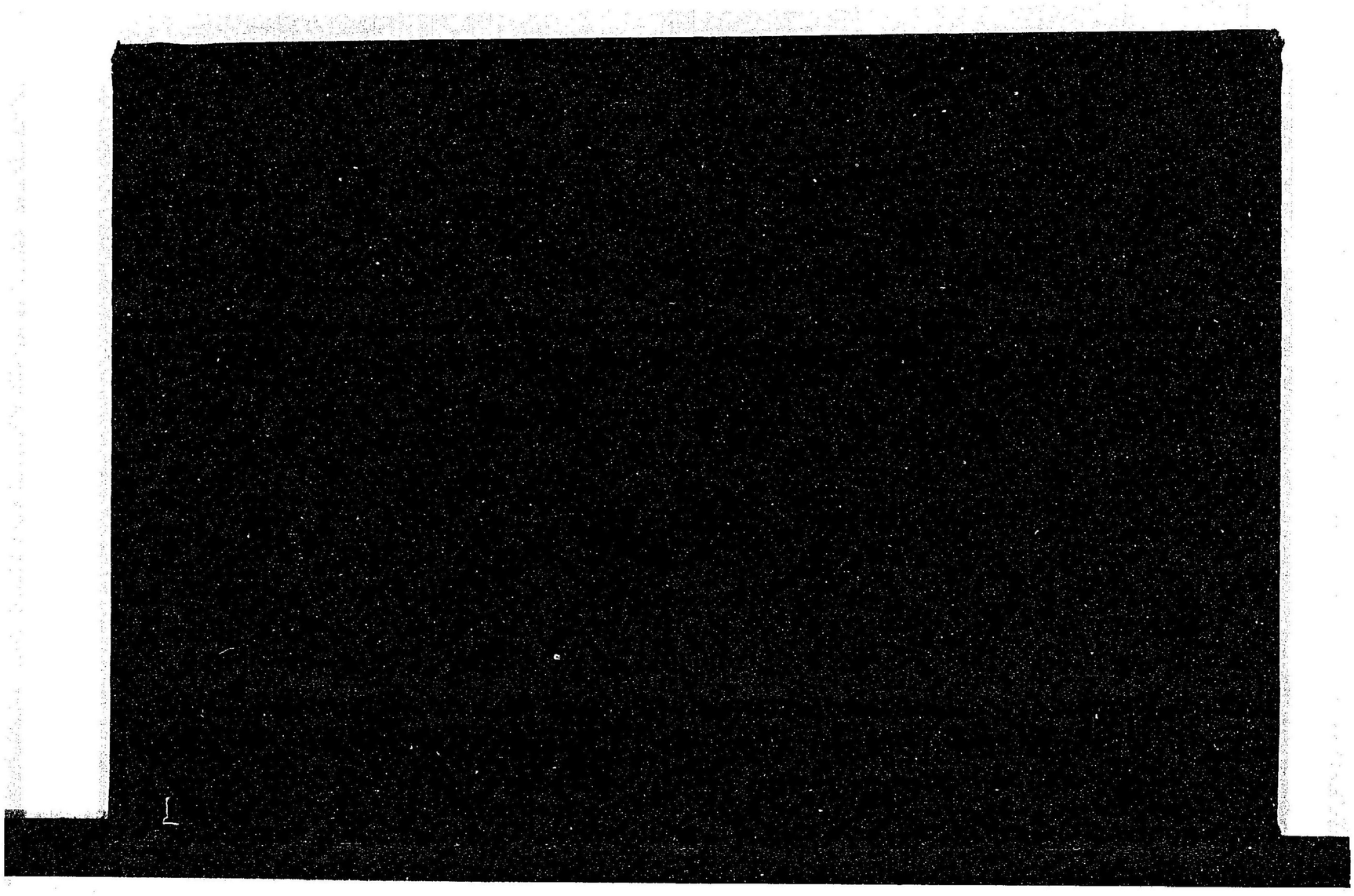
中谷延治先生解說
◎ル（シル）氏訓練論　近刊

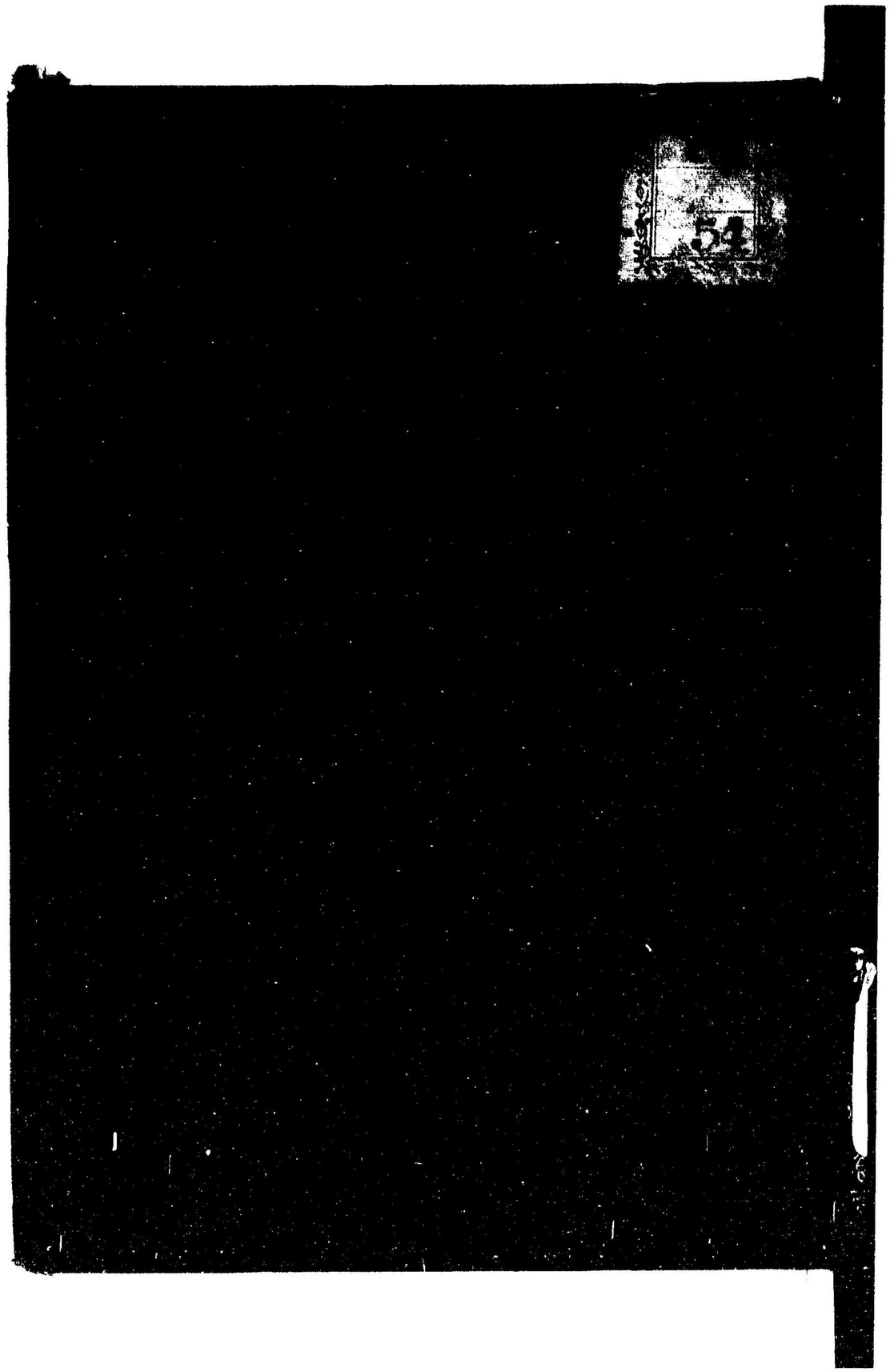
文學士吉田熊次先生解說
◎ン（ドエリ）ゲ氏修身科教授論　續刊

文學士春山作樹先生解說
◎ゲ（ラン）氏類化論　近刊

文學士大瀨甚太郎先生解說
◎ー（モン）氏兒童の社會的意識の發達　續刊

119
116





102136-000-1

94-54

ジャパニーススケッチブック

育成会

M35

EAF-0128